〔書　評〕

『図説静岡県方言辞典』

静岡県方言研究会
静岡大学方言研究会　共編

江端義夫

○はじめに

本書は書名が方言辞典とあるけれども、実際は七六八枚の方言地図を収載した静岡県方言地図および解説である。

従来日本の方言研究界では、一県を単位としてこれほど多くの方言地図を多項目にわたって取りあげた仕事は、管見による限り無かったように思う。見うるのは、せいぜい本書の半分ほどの地図枚数ではなかったか。たとえば『日本言語地図』は二八五項目の三〇〇枚であり、『瀬戸内海言語図巻』は二四〇項目の老・少五〇二枚である。地域の広狭があるので単純に比較はできないとしても、七六八枚の方言地図を一挙に見せてくれる本書は、実に壮観であり快挙である。しかも明瞭な分布の出ている図が多い。

本書の構成は次のようになっている。

『図説静岡県方言辞典』の刊行に
あたって……小泉　保
第一部　静岡県方言の概説
1　概観……望月誼三
2　音韻……中條　修
3　アクセント……山口幸洋
4　語法……小泉　保
5　語彙……日野資純
第二部　静岡県方言の図説
1　はじめに……中條　修
2　方言地図と解説……中條　修、中田敏夫
木川行央、静岡大学
方言研究会
1天地・季候／2動物／3植物／4身体／5衣／6食／7住／8人間関係／9教育／10遊戯／11民俗／12職業／13農林漁業／14時・空・数／15行動・感情／16助詞・助動詞
3　索引　(1)項目別索引　(2)方言形別索引
第三部　静岡県方言関係文献目録
(付)静岡県方言研究会の記録……日野資純、中條修

頁数では第一部が全部で七四頁、第二部が八二四頁で、第三部がわずかに一三頁である。本書の中核が第二部の静岡県方言の図説にあることは、明らかであろう。

一、本書の特色

本書には多くの注目すべき特色がある。それらの中から五つを取りあげて考察してみる。

(一)多くの項目数を持つ県域言語地図

ヨーロッパ諸国の言語地図のように数千の調査項目が稀でないのとは違って、日本では伝統的に二百から三百の調査項目が一般的である。したがって本書のように六三七項目、七六八枚の言語地図が一書にまとめられた段階で、もはやこれは、従来の常識を打ち破ったと考えられる。

ところで、言語地図は対象地域の広さによって四種類に分けられるであろう。一つは狭域言語地図である。これは糸魚川地方とか庄内地方とか志摩地方、上伊那地方とかのように、限定した地域で、ときに全集落を徹底して調査しうる長所がある。二つめは県域言語地図であり、これの典型例が本書である。全集落の調査は不可能に近い。そこで本書のように項目数を多くするというやり方が有効である。その他に複数の年層を調査することもできよう。三つめは広域言語地図であり、四つめは全国域言語地図である。

右の四種類の言語地図の中で、本書が県域言語地図として多数項目を選び、地点数を七九に限定したのは一つの実験の成功例だと言ってよいと思う。言語地理学的研究における解釈を行うことになれば、七九地点の分布では心もとない場面に出あうことがないとは言えない。しかしながら、千項目ほどを調査して、ここに七六八図を収載したのだから、それだけですでに語彙集としての価値が生じたことにもなるのである。これはこれとしての価値があると見なされる。

さて七六八枚の方言地図は、次の16分野に分類されている。

1 天地・季候——65項目、82図
2 動物——64項目、73図
3 植物——35項目、40図
4 身体——78項目、97図
5 衣——40項目、53図
6 食——33項目、42図
7 住——37項目、46図
8 人間関係——36項目、41図
9 教育——10項目、14図
10 遊戯——25項目、27図
11 民俗——18項目、21図
12 職業——8項目、10図
13 農林漁業——32項目、40図
14 時・空・数——68項目、86図
15 行動・感情——59項目、67図
16 助詞・助動詞——29項目、29図

以上の全体で六三七項目、七六八図ということになる。この分類表は平山輝男氏の『全国方言基礎語彙の研究序説』における分類体系とよく似ている。それはまた、東條操氏の『分類方言辞典』のに通じる思想であろう。分野毎に地図枚数を比べると、「天地・季候」、「動物」、「身体」、「時・空・数」、「行動・感情」が他よりも多い。しかし分野間に地図枚数の極端な偏りはなく、ほぼ妥当な分散が見られる。

(二)方言地図と方言辞典との融合

本書は原則として一頁の上半分が方言地図に、下半分が見出し語の解説に当てられている。一項目が一頁で完結するように配慮されているので利用し易い。下半分の解説では、初めに項目(見出し語)がどのような質問形式で調査されたかについて書いてあったり、書いてなかったりする。次いでその項目に関して、明治四三年版の『静岡県方言辞典』では、どのような語形が記されていたかを掲げる。特に静岡県方言辞典という書名がゴチックになっているのが注目される。これには相応の理由があったことが、小泉保氏による冒頭の文章で知られる。

別に、特記すべき吉見書店の発行物は、明治43年の静岡県師範学校・女子師範学校編の『静岡県方言辞典』で、最初の全県的方言辞典であります。当時としてはこの種の辞典は数少なくこの分野における先駆的偉業でありました。

吉見三郎氏は第二の記念事業として、前記『静岡県方言辞典』の増補改訂を意図し、『駿国雑誌』の編集者中川芳雄氏に依頼されましたが、後に静岡県方言研究会が引き受けることになりました。これを見れば、本書の意図が『静岡県方言辞典』の増補改訂版を出すところにあったということが分かると同時に、前書の書名が踏襲されていることの理由についても了解されるであろう。またこれが、いかに方言地図集らしい仕事であっても、静岡県方言地図という書名にはならない道理が存したことも分かる。このような外的な事情も、方言地図と方言辞典との融合を促す背景になっている。

次いで、その他の静岡県下の方言文献中に見出される関連語形を引用し、分布域を記してある。その後に『日本国語大辞典』から該当項目の語釈や語史、方言分布などを、そのまま可能なかぎり多量に引用している。そして『全国方言辞典』からも該当箇所が引用してある。したがって、静岡県下の当該項目の諸事象について、おおよその全国分布や語史が推定できるようになっている。

(三)静岡県方言資料集成を兼ねる

先述のように一頁の上段には、静岡県下七九地点での臨地調査によって得られた事象をもとにして作成された方言地図が見える。下段にはまた、『静岡県方言辞典』(明治四三年版)に記載された関連事象が掲出されている。それに次いで、静岡県下市町村教育委員会などで発行された方言集や市町村誌の類に採録されている事象が、片仮名ゴチック体で示してある。その際、出典となる文献は市町村名による記号で表す形がとられ、文献が複数にわたる場合などは、たとえば静岡1、静岡2のように数字の補助記号を付して区別された。これらの略記号で引用された文献数は六四にものぼる。他方、六四種の略記号を挙げるのとは違って、文献名をそのまま挙げるという特別な扱い方がなされているのが、『静岡県方言誌』と『静岡県方言の研究』および『日本言語地図』、『日本国語大辞典』、『全国方言辞典』である。こうして本書は、特に静岡県下の大正期以降の文献に関して、当該項目についての方言を集成した労作となっている。この一冊によって、昭和末期における静岡県下の六三七項目についての方言事象の変相がとらえられる。本書は、静岡県下の方言資料の集大成を試行した、非常に便利な辞書である。

(四)短期間の臨地調査による斉一な資料

本書のための臨地調査が本格的に開始されたのは昭和五三年七月だという。調査は中條修氏、中田敏夫氏、木川行央氏および静岡大

学方言研究会の学生が行った。方言話者は、次の三条件に合致することを原則にしたという。

①その地域の代表的な職業に従事してきた人。

②年齢は65歳以上（大正5年以前生まれ）の男女、できれば複数が望ましい。

③余所での居住歴が3年以下であること、ただし、軍歴についてはその限りではない。

話者の協力によって一地点三日間ていどで調査が進行したそうである。二年間ほどの中断の後、昭和五八年から五九年末にかけて精力的に調査にとりくみ、予定の七九地点をほぼ完了したのだという。考えてみれば、臨地調査に足かけ六年もかかっている。方言地理学的調査は短期間に完遂するのが良いに決まっている。だが、六年間は項目数の多さから見て、必要最小限の時間ではなかったかと思われる。学生の調査した資料も入っている点で若干の心配も無いわけではないが、三人の研究者の入念な点検がなされているものと推察される。諸般を考慮すると、本調査資料は比較的短期間に調査し終えた斉一なものであると言えそうである。

(五)方言地図学的手法の手堅さ

方言事象の系統関係や歴史が作図者によってどのように解釈されたかは、方言地図の凡例上に示される。凡例は解釈の結果である。方言事象がどのような順序で整頓され、どのような符号が当てられるかは、言語史に対する読みの姿勢に関わることである。これらを方言地図学的手法と呼ぶとすれば、本書は実に手堅い客観的な方法に立っていると言ってよい。たとえば、見出し語と凡例の初出語とを一致させた地図が極めて多いのはその好例である。第一図の「じめん」の図から始まってほとんどの図が、いわば共通語の分布状況から逆史的に方言の歴史を考えていこうという立場に立っている。これは従来の多くの方言地図の踏襲してきた無難なやり方でもある。ところが、語形は小さな単位の形態素が複合して構成されていくものだとする考え方を、かたくなに守る姿勢が見える。「だいく」の図で、「ダイク」のあとに「ダイクサン」が来るのは肯ける。しかし「蚕の蛹」の図で、「ニシャ」の次に「ニシャー」、「ニーシャー」が来て、その後に「ニシャードッチ」が来るようになっている。[注1] 民俗学的には「ニシャードッチ」という慣用句が先に存したはずである。だがそれを形態素に分解し、それらの構成によるものと考えるところなどは、杓子定規とも言える律義さである。しかしながら、語形をまとめず、変相に応じて忠実に符号が与えてあり、良心的である。総じて本書は生の資料を大切にした、すぐれた方言地図であると思われる。

以上のように五つの特色を指摘して、本書を方言研究史上の画期的労作であると見なしたいと思う。少なくとも本書は、県域言語地図がとりうる一つの新鮮な型を示したと言えると思うのである。

二、本書についての気付き

(一)見出し、または調査項目について

本書は調査項目の選定の基準として、次のような原則を設けている。

①方言生活に密着して、日常的によく使われることばで、基礎語彙的性格を有するもの。

②全県的な視野で調査ができ、かつ地域的対立が予想されるもの。

③『静岡県方言辞典』（明治43年）に出ている語形が、できるかぎり拾えるもの。

これを見ると①と②・③とは対立しそうなものだが、どのように調整するのかという点に関心が向く。そこで少し古いが、スワディッシュの基礎語彙二〇〇と本書の項目とを比較してみることにした。その調査項目は服部四郎氏の論文[注2]によった。本書の六三七項目、七六八図とスワディッシュの二〇〇語とを比較すると、共通の語が二九であった。それを書き出せば次の通りである。

all (of a number), bad (deleterious or unsuitable), big, brother, dirty, dry (substance), to fall (drop rather than topple), father, few, good, head, to hit (with fist), mother, old, to push, right (correct), road (or trail), small, snake, star, stick (of wood), straight, sun, to tie, tongue, to walk, warm (of weather), wind, yellow,

次に、本書の六三七項目、七六八図を『アジア・アフリカ言語調査票』の上巻の二〇〇語と比較してみた。次の三〇語が共通の語であった。

あたま、ひたい、まゆげ、くちびる、した、つば、あご、ほお、ひげ、かお、うで、ひざ、こな、におい、くちばし、うし、へび、あり、はたけ、みち、いけ、たいよう、つき、かげ、ほし、きのう、なんじ、はんぶん、ぜんぶ、いくらか、

三つの文献を比較してそれぞれに共通する語に傍線を引いたところ、八語であった。したがって、本書には調査項目の選定にあたって「基礎語彙的性格を有するもの」を第一に優先したと書かれているけれども、必ずしもそのようにはなっていないと言うべきであろう。私は統計のことに疎く、数字について確かなことは言えないが、本書には、先の基礎語彙二〇〇のうち、三〇ほどしか採用されていないことからもそのように判断してみた。しかし、県域言語地図や狭域言語地図の場合は、基礎語彙を調査項目に立てても、明瞭な分布が出ないことが多いので、せっかく分布図を描いても、本に仕上げる段階でそれを除外してしまうということもあるのだろうと思う。惜しいことである。

ただし本書の項目を『日本言語地図』のと比較してみると、四割が共通する。この数字を見るかぎり、基礎語彙を尊ぶ姿勢は守られていると言える。欲を言えば本書が方言地図でなくて方言辞典とあるのだから、分布が明瞭でなくても、なおさらのこと、「腹、雲、耳、四」などという基礎語彙[注3]も収載されることが期待される。本書から除外された分布図に、より多くの基礎語彙が残っていると推察される。それらの全域分布の図もどこかで公表してもらえれば、それとしての価値はあるであろう。

(二)質問文、話者の説明について

七六八枚の方言地図に、質問文の形式についての説明は若干見られるが、質問文そのものは記されていない。したがって、どのような文脈で得られた方言事象なのかが分かりにくくなっている。パロールを地図化したものではなくて、ラングの地図になってしまったようである。

たとえば「なみ①」「なみ②」の図では、〝①は大きい波、②は小さい波を何と言うか聞いたものである〟と注記されている。これだけの解説では、川の波か海の波か、規則的に生じる波か不規則的な波か、波そのものか波頭か波のうねりか、いつごろの季節の波かな

どが、全く分からない。ただ、「大きい波」を「ナグラ」と言う地点が九地点、「小さい波」を「ナグラ」と言う地点が一一地点にあるということなどは分かる。質問文を方言地図に添えることによって、これらの多くが解決するはずである。方言地図から質問文を省略することはできるかぎり避けたいものである。

また、方言事象に関する話者の説明も、どこかに書き出しておくのがよくはないだろうか。私どもが先年遠江で方言調査を行ったとき、「ナグラ」について次のような説明を得た。

aナグラ（川で魚が表面近くを泳ぐときに水が揺れ動く。それをナグラと言う。「ナグラガ　タッテル」と言う。）静岡県周智郡森町森、一九八六年。

bナグラ（川の小波。小さい波。「ナグラガ　タツ」と言う。）静岡県小笠郡大東町菊浜、一九八六年（アクセント欠）。

cナグラ（静かな波。さざ波のこと。「ナグラオ　ウッテル　ゾ」と言う。風波のこと。）静岡県浜松市天竜川町、一九八五年。

このように同じ「ナグラ」についてでも、三地点で少しずつ意味用法が異なっているのである。aは魚の泳ぎで一時的に生じた水の盛り上がりである。b、cはさざ波であるが、bは川の波に限られる。また格助詞のとり方に違いがある。このような話者の説明は貴重であるが、本書に引用された『日本国語大辞典』や『全国方言辞典』、『静岡県方言辞典』には、微妙な意味用法についての記述が載っていない。方言事象についての話者の説明は、語義や語史を正しく解釈するための根拠になるものであろうと思う。

方言地図に質問文を添えることと話者の説明を収録することとは、これからの言語地図にとって不可欠の要件になると思われる。

㈢話者、調査地点について

社会言語学の急速に進歩した今日においても、方言話者の選定条件が「65歳以上の男女、できれば複数が望ましい。」としてあるのは、いかがなものであろうか。因みに一地点で女ばかりが話者になっている御前崎、吉田、島田、御殿場、戸田、天城湯ヶ島に注目して、周辺と著しく異なった符号が出てこないかどうかを、地図の初めの方から順に眺めてみた。すると、「じめん、つちのかたまり、くさはら、ひかげち、かげ、やまくずれ、かぜ…略」のような項目で、一定の傾向が見出された。これには必ずしも性差ばかりが影響を与えているとは言いきれない。けれども、性差に無縁だとも言いきれない。敬譲や文体に関係する項目では、性差が微妙に反映することが予想される。そこでまず、厳密なパロールに徹して、そこからラングを読みとっていくというような行き方が良いのではないかと考えたしだいである。

ところで六二三頁から六三〇頁にかけて、「まわり」「そば」「あべこべ」「かわり」「せんたん」の図がある。御前崎近辺の数地点には、これらに対する符号が押印されていない。該当する言い方がないのか無回答なのか、あるいは未調査（調査漏れ）なのであろうか。いずれかを示す符号があった方が、読者に対して親切であるにちがいない。

その他年齢条件に適合しない話者、一地点における話者の人数の統一なども問題である。しかし、私の同様な経験と重ねてみるとき、公的機関に話者の選定を依頼する便利な方法をとるかぎり、どうしても受身的にならざるをえず、義理と人情とのはざまで妥協してしまうことになりがちであった。この点についての筆は進まない。

(四)本書の解説について

土井忠生氏は辞書の記述について述べられ、辞書には「手際よく解決を与える辞書」と「問題を提起する辞書」とがあるとされた。これは示唆的な二分法であると思う。この考え方に従えば、本書は後者に属することになるのであろう。

先述したように本書の解説は、見出し語について考察した結果が記されているわけではない。静岡県下の数多くの文献を渉猟して、見出し項目に関連する方言事象がどの文献にどのように見出されたかを整理したものである。考察にあたるところは、『日本国語大辞典』の語釈を引用することで、それに替えている。だから、ヨーロッパ諸国の方言辞典が苦労して模索しているところの語の生態が、本書には記述されていない。読むための辞書ではなくて、見るための辞書が目的であれば、それとして本書は成功しているのである。ただし方言辞典であれば、当該地域独得の語の意味用法に関する記述を期待したくなるのは否めないであろう。

方言地図と一体になった形で語彙の記述が理想的に行なわれることが、次の課題ではないだろうか。

三、静岡県方言の概説について

本書の前半の七四頁に、静岡県の方言が概説されている。その執筆者は上述した五人で、みな静岡県の方言の山野に長く親しみ、深くそれを耕して来られた方たちである。

概説は望月誼三氏の執筆である。静岡県方言を三つに区画し、富士川以東の駿河東部・伊豆方言、富士川以西・大井川以東の駿河西部方言、大井川以西の遠州方言について、音韻・文法・語彙にわたる適切な説明が見える。また、特殊地域と見なされた四地域（井川、南伊豆、水窪、浜名湖）の方言状態が簡潔に記されている。

中條修氏は音韻を記述しておられる。音素と音韻体系、母音、連母音、子音、撥音・促音・長音について分布地域を挙げながら、要点を押さえて、具体的に説明している。特に静岡市方言の連母音の融合現象についての記述が詳細である。

山口幸洋氏がアクセントを担当する。氏は方言のアクセントを「方言会話の調子全体を司さどるすべての上昇、下降に関わる法則――文アクセントの体系」と見なして、県下のアクセント体系を系統図に表し、各地方言アクセントの体系的特色について、豊富な実例をあげながら説明している。その用語や語り口は独得であり、独自の世界が窺える。

語法は小泉保氏の筆になる。氏は記述の立場を「言語の記述は語の単位から始めるべきで、これを『こま切れにした』形態素の連続として説明したり、語尾を羅列したりするのみでは方言の個性を見失ってしまう虞れがある。すなわち、語の単位相互の間にどのような文法的対立関係があるかを観察し、そこから方言特有の体系を組み立てていくべき」だといわれる。静岡県の方言語法についての体系的な記述が見られる。その記述単位は語であるというより文節である。頁数は多くないが、簡潔で行き届いた説明がなされている。ただし、語法にこだわって、方言の個性を反映した文法にまでは、記述を拡大しておられないように見受けられる。

語彙は日野資純氏の執筆である。氏は昨今膝栗毛の方言描写が写実性に欠け、学問的資料としては不向きであると言われてきたことに対する反論を出された。たとえば「じるくたい」や「ひやうたく

れ」「ゑれゑれ」などの例について同時代の『駿国雑誌』における用法を検討することにより、膝栗毛の描写の写実性を強調されたのである。また、方言語彙を俚言と訛語に分け、さらに訛語を単純訛語と類推訛語に分けるなど、興味深い考えが見られる。

さて、以上の五人の研究者のうちほとんどの方が七六八枚の方言地図を参照しないで執筆されたようである。方言地図の分布を確認した上で、それとの有機的関連を持たせつつ、従来の研究成果と対応させて記述するということがあって然るべきであろうが、それが見られなかったようである。一書としての一体性から見て、端々にまで目くばりが行き届いている方が望ましいのではないかとも思うのである。

四、項目別索引と方言形別索引

本書には巻末に二種類の索引が設けられており、非常に便利である。一つは項目別索引であり、他の一つは方言形別索引である。

項目別索引では、方言地図の見出し項目が五十音順に挙げてあり、本地図および静岡県下の方言文献中に見出された方言語形が、見出し項目ごとに集成されている。この索引を引いて読むことによって、俚言または訛語の種類と多寡とを具体的に知ることができる。

もう一つの索引は、項目別索引をもとにして、それを作り替えた「方言形別索引」である。これは方言地図の凡例に見られた語形および文献に掲出されている語形を、語形の方から引くことができるようにと組み替えたものである。同音語を一括して、それに対して頁数を列挙するという従来のやり方はとらなかった。したがってたとえば、本書中で同音語が五頁にわたって見られたとする。すると、同じ語形が五行にわたって出てくることになるのである。

ところで、この「方言形別索引」には一つの気になる不ぞろいが見られる。それは、たとえば「あいそう（愛想）がわるい」の項目では、方言形「スッチョーナイ」が『静岡県方言辞典』（六九三頁）や『富士の地方ことば』（六九三頁）にも載っているとされている。またその次の頁（六九四頁）には、「あいそうがわるい」の方言地図があって、「スッチョーナイ」の分布が見える。しかし、巻末の「方言形別索引」を見ると、六九四頁だけ、つまり方言地図の頁だけが載せてあるのである。この不備は「ぬかるんでいる」や「からかう」などの項目についても同じである。すなわち、一頁の中で方言地図と解説とを完結しえなかった項目については、一方が索引から欠落するという結果になってしまっているのである。この点は、便利な索引であるだけに残念でならない。

○おわりに

本書を契機として、県域言語地図の作成が一層盛んになることを希望したい。また本書が先鞭をつけたように、方言地図を大幅に利用しそれを基にした本格的な方言辞典が、図説という冠辞を取り除いた形で充実するよう、今後の発展を期待したい。

最後に、種々の希望を述べたが、『図説静岡県方言辞典』を作りあげられた静岡県下の研究者の方々の熱意と出版社の良心とに、心からの敬意を抱きつつ、本書の出版に限りない祝福の誠を贈りたいと思う。

注1　柳田国男『西は何方』（一九四八年、甲文社）が参照される。

注2　服部四郎「「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について——日本祖語の年代——」(『言語学の方法』所収、一九六〇年、岩波書店)に戴っている。

注3　ALE(ヨーロッパ言語図巻)の五四六語の調査票(一九七六年)でも、日常の基礎語彙が尊重されている。

注4　土井忠生「記述とはどうすることか」(『方言研究年報』18、一九七五年、広島方言研究所)。この討論は記述の本質を突いている。

注5　小島公一郎「西ドイツにおける地理的言語研究の近況——地域辞書と機関誌とを中心に——」(方言研究叢書『2、一九七三年、三弥井書店)。この本で紹介されたライン地域辞書のregnenの記述には学ぶべきところが多い。

(昭和六十二年四月十日発行　吉見書店刊　B5判　九二四ページ　一九五〇〇円)

——広島大学助教授——

(平成元年五月二十一日　受理)